



# クィアなフェミニストとして 生きること

文筆家 水上 文

クィアなフェミニストとして生きるとは、どういうことだろう？ 私はこの問いを、個人的であると同時に政治的な問いとして引き受けて考えてみたい。

少なくとも私にとって、フェミニストであることの意味は明確だった。なぜならフェミニズムという言葉を知るよりも前から、小さな女の子として、性が恐怖の対象として植え付けられる社会を生きていたのだから。ひとりであれば大人の男性にスカートの中に手を突っ込まれ、道を歩けば勝手に写真を撮られ、電車に乗れば痴漢に遭う、そんな社会で生きていたのだから。あるいは、私の意思に関わらず男性に好まれることばかりを期待され、いずれ妊娠するものと当然視され、そうした期待に沿って生きることを強要される空気の中で生きていたのだから。だから私にとってフェミニズムとは、女性の声が軽んじられ、その主体性が尊重されず、他ならない自分のものであるはずの身体が身勝手に扱われかねない、そんな暴力に抗することなのだった。

一方で、クィアであることの意味は不明瞭だった。私が子どもだった頃、現実にも物語の中にもクィアな人々はほとんど存在しておらず、クィアとして生きるとは何を指すのか、どんな人生が待っているのか、よくわからなかった。だから自分がクィアであると認めることも容易ではなかった。異性愛規範と性別二元論的な枠組みの強固に存在する社会で生きてきた私は、どちらにも与しない自分のクィアネスを把握しかねていたのだ。

とりわけフェミニストとしての私は、未だに戸惑っている。

たとえば男性による女性への暴力に焦点を当てて考えてきたフェミニストである私は、トランスマスキュリンな人々——出生時に女性を割り当てられ、男性的なジェンダー表現をする人々のこと——が女性から受ける性暴力にほとんど無知だった。「女性を欲望するからそういう格好をするんだろう」

という身勝手な想定をされ、私のような女性的な外見の女性が受けることのない扱いを、女性からされることがままあることについて、私は知らなかった。あるいは、女性に押し付けられるジェンダー規範に焦点を当てて考えてきたフェミニストである私は、男性に押し付けられる男性らしさの抑圧の内実も、それが男性として生きさせられていた／いる経験を持つトランスフェミニンな人々——出生時に男性を割り当てられ、女性的なジェンダー表現をする人々のこと——にとってどれほど破壊的になり得るかということにも、ひどく無知だった。また、人を女性と男性に分け、後者が前者を抑圧する社会について考えてきたフェミニストの私は、その振り分けが人生の途中で変わるという経験——性別移行——について、実感をもって考えられていなかった。それから、ノンバイナリーの人々が被る不可視化にも無頓着だった。どちらの性別の集団からもはじき出されていると感じること、どのような場所でも男性なのか女性なのかと勘繰るような眼で見られること、性別二元論に満たされたこの社会でどこにも居場所がないと感じることの苦しみを、フェミニンなシスジェンダーの女性として生きてきた私は経験せず済んでいた。たとえばこの隅々まで性別二元論が強固に蔓延しているこの社会で、ノンバイナリーの人をノンバイナリーの人として尊重するためにはどうすればいいのか？ 私が出来ることとは何だろう？ クィアでフェミニスト的な解放とは、何を指すだろうか。

要するに、個人的にも政治的にも、私は今なお戸惑い続けているのだ。

だから考え続けている。人と関わることも自分自身として生きること、クィアな女性である私にとっては、社会に立ち向かうこととほとんど同義である。クィアなフェミニストとして生きるとはどういうことか？ 私はそれを、人生の問いとして抱え込むのである。

## セクシュアルハラスメント： アメリカ女性のオーラルヒストリー (口述歴史) における沈黙と語り

講師

エステル・フリードマン  
(スタンフォード大学名誉教授)

2024年8月5日(月)、名古屋都市センターにおいて、上記国際講演会を、スタンフォード大学名誉教授エステル・フリードマンさんを講師に迎えて開催した。フリードマン教授のご専門はアメリカ史で、特に女性、フェミニズム、セクシュアリティに取り組まれてきた。今回は彼女の最新研究から、1970年代始めにセクシュアルハラスメントという言葉が生まれる以前に、現在セクシュアルハラスメントと呼んでいるものを女性たちはどのように経験していたかを、新しい研究方法で大量のデジタル化された女性たちの口述資料を元に分析したものを発表された。これまでの歴史研究とは違う研究方法は、大量のデジタル化された女性たちの口述資料を、ビッグデータ分析専門の教授の力を借りながら、分析するという全く新しい研究方法である。過去10年間、全米に散らばるアーカイブに眠っていた口述資料は次々とデジタル化されてきた。今では、多くの図書館がデジタル化した口述資料をオンラインで公開を始めている。これらの口述資料は特に性的な暴力についての口述資料ではなく、女性の生活を口述する資料である。

2018年彼女はオンラインで入手できるデジタル化された口述資料コレクションを元に「性的暴力」に関するキーワードで実験的に検索を始めた。結果は、レイプ、近親相姦、ハラスメントの口述資料が期待以上に検出できた。それから6年、デジタル人文学の同僚の Natalie Marine-Street 博士とともに Stanford Oral History Text Analysis Project(OHTAP) を立ち上げ、「データマイニング」の研究方法をより精巧なものにしつつ繰り返し検索分析し、ようやくその分析の結果を刈り取る時が来たと話している。

多くのインタビューされる女性たちは、性的なトラウマ



について語りたがらない。しかし、沈黙は時に語りと同じぐらいの意味を持っている。また、何世代もさかのぼって、奴隷時代のレイプについて語るものもある。いくつか興味深い例が挙げられたが、印象に残ったのは、大学時代の知人による彼女自身のレイプ経験だった。最初の10年はそのことを口にできなかったという。沈黙には、記憶を消したいという思いや個人的な責任感や頼る人がいないことなどの原因が分析の結果突き止められた。また後にセクハラが法的に男女差別であると認められたことや MeToo 運動によって声を上げることができるようになったと語っている。

58名の参加者があったが、アンケートからは、興味深いトピックでそれぞれ参加者が考えさせられる内容であったことがわかった。

武田 貴子 (東海ジェンダー研究所理事)

参加者の  
アンケートから

1970年代以前のアメリカの貴重なセクハラ(今でいう)の実態と研究に触れることができ、感動しました。女性たちのデジタル化された口述資料があるのも驚きでした。日本では、どうなんだろう。すさまじいセクハラがあった記録や資料はあるのだろうか?と思いました。オーラルヒストリーの重要性を再認識しました。ありがとうございました。

歴史学の枠組で(心理学 etc. ではなく)、性暴力被害者の女性たちの沈黙と語りを分析したとても興味深い講演会でした。「沈黙」の意味をより深く考察していきたいと思います。

## 個人助成受託者報告会

2024年7月6日(土)、2023年度の個人助成受託者の報告会が、本研究所のセミナー室で開催されました。報告者は5名で、昨年の受託者選考会のことがい起こされました。優秀で成果が期待できそうな応募がいくつもあり、4名には絞り切れなかったのです。トップバッターは、留学先のオックスフォードからのリモート報告の予定でしたが、止むを得ないご事情で来年に回っていただくことになりました。

遠路会場においで下さった4名の報告は、どれも聞き応えのある充実した内容でした。西山代表理事の挨拶に続いて塩田潤さんの「アイスランドにおける1990年代の育児休業論争」から始まりました。ジェンダー・ギャップ指数ランキングで常に1位をキープし続けている国の話ですが、そうなるにはそれなりの努力が払われてきているのです。明快なレジュメやPPTに助けられて大いに啓発されました。

2番手は、北海道からご来場くださった松本祐生子さんによる「ロシア=ウクライナ戦争とフェミニスト運動」と題しての発表でした。英語はもとよりロシア語の新聞や雑誌も縦横に読み解く語学力をお持ちで、サンクトペテルブルクでの調査も交えた発表は、レベルの高いものでした。芸術活動を通して表現されるフェミニスト運動で、評者には少し難しく思われる面もありましたが、将来のさ



らなる成長を期待させるものでした。

3番手は牧野良成さんの「1980年代の女たちの三里塚闘争：関係資料にみる交流と共同行動の諸相」で、彼の着眼は、成田空港開港(1978年)以降の運動にあり、それに女性が深くかかわった経緯に迫ったものでした。80年代を同時代として生きてきた多くの聴衆側ばかりでなく、今回の若い他の報告者からも質問が沢山出ました。

最後は、アメリカからの帰国最終日に報告会においで下さった中原理沙さんによる「米国の人種的マイノリティ女性と科学教育：第二次世界大戦期のスペルマン・カレッジに焦点を当てて」でした。研究を進めていく中で、資料の欠落に逢着することになった中原さんに、他の報告者たちが突破口を開くさまざまな提案をする場面があり、これほど分野の異なる研究者が集いながらも、楽しそうに互いに質疑する様子が、報告会全体を通して常に見られたことが、とても印象に残る今年の報告会でした。4人のご報告を、次には『ジェンダー研究』誌上で拝読するのを楽しみにしています。

小川 真里子 (東海ジェンダー研究所理事)

### ● 2024年度 研究助成受託者の決定

#### 個人助成 4名(応募総数38名)

波塚 奈穂 (東京大学大学院 総合文化研究科博士後期課程)	パナマ先住民女性の社会的・政治的地位向上の要因 ——オマール・トリホス政権下の教育改革に着目して——
石幡 祐輔 (デューク大学 経済学部博士課程)	ジェンダー先進国における出生率低下の要因に関する経済学的分析: 婚姻形態と女性の教育・就労を取り巻く状況の変化に着目して
余 楽 (お茶の水女子大学 人間文化科学研究科ジェンダー学際専攻D2)	現代中国における農民工子ども世代の移動と定住のジェンダー分析 ——〈長女〉の経験を事例に——
坂田 舜 (九州大学 人文科学府イスラム文明史学専修博士後期課程)	「トルコの女性」をめぐる言説研究:東部・南東部に着目して

#### 団体助成 2団体(応募総数4団体)

加納実紀代研究会	加納実紀代資料室「サゴリ」を起点とした国際的な場としての「広島」の創出 ——加納資料の利活用を通じた研究ネットワークの構築——
「越境とナショナリズムの再考」研究会	越境する記憶の中の〈語る女性〉と〈語られる女性〉に関する共同研究 ——東アジア近現代文学作品における女性のナショナリズムの内面化——

## 事業報告

### 海外調査派遣報告会

コロナ禍で繰り延べになっていた海外調査派遣が、今年の3月に漸く実施され、その報告会が6月9日に行われました。派遣先はフランスで、新井美佐子さん、左高慎也さん、島袋海理さんの3人に、各種ジェンダー研究機関を訪問してインタビューした結果を「フランスにおけるジェンダーの今ー日本との比較から」と題してお話して頂きました。

新井さんは、「革命の国フランス」ならではの、特に1968年の五月革命以降におけるジェンダー平等政策を評価しながら、しかし、それでもなお家事・育児負担は女性に偏っている現状を指摘。国立の「ジェンダー研究所」の訪問では、所長から「東海ジェンダー研究所と是非交流したい」という要望があった旨、ご披露されました。政治学専門の左高さんは、候補者男女同数法の「パリティ法」等を紹介。「欧州女性ロビーフランス代表部」の「フランスの動きは世界に影響を及ぼすし、世界は私たちの動きを見て



いる」という言葉がとても印象的だったそうです。LGBTQを研究している島袋さんは、同性婚の成立過程と現状について、我が国にとっても非常に示唆に富む報告をして下さいました。

参加者30人で会場のセミナー室は超満員、若い研究者から熱いエネルギーを貰った報告会でした。

日置 雅子（東海ジェンダー研究所理事）

## お知らせ

### 愛知県「男女共同参画推進活動者表彰」を受賞

東海ジェンダー研究所が、愛知県の令和6年度「男女共同参画推進活動者表彰」を受賞しました。多年にわたりこの地域のジェンダー平等の推進に尽力したことによるものです。

表彰式は、9月2日の「2024あいち男女共同参画のつどい」の中で行われる予定でしたが、台風10号の接近で中止となり、後日、表彰状が、愛知県男女共同参画推進課長の各務さんから西山代表理事へ伝達されました。



## 賛助会員を募集しています。

賛助会費 年間 一口 1,000円  
振込先 郵便振替口座 00820-0-77338  
公益財団法人東海ジェンダー研究所  
(振込手数料は当方負担)

### 他行からお振込みの場合

銀行名 ゆうちょ銀行  
店名 ○八九  
預金種目 当座  
口座番号 0077338  
(振込手数料はご負担ください)

\* 会員の皆様には当研究所の年報「ジェンダー研究」やニュースレター「LIBRA」、講演会などの事業のご案内をお送りします。

\* 当研究所は公益財団法人の認定を受けており、会費及び寄付については税法上の優遇措置があります。

### 編集後記

気づかなかった様々な差異があり、自分も知らぬ間に人を抑圧しているのかも知れないと思いました。国際講演会、個人助成受託者報告会、海外調査派遣報告会と盛り沢山の報告ですが、いずれも盛況でした。ご参加くださった皆さま、ありがとうございました。

# LIBRA

公益財団法人 東海ジェンダー研究所

〒460-0022 名古屋市中区金山1-9-19 ミズノビル6F

TEL 052-324-6591 FAX 052-324-6592

E-mail info@libra.or.jp https://libra.or.jp/